

老人ホーム安土荘 コラム

『あしたの居場所』

養護老人ホームや特別養護老人ホーム（特養）など、聞いたことはあっても、それぞれを理解しようと思うのは、自分の親がそれなりの年齢に達したときくらいではないだろうか。

今回訪ねた『安土荘』は、養護老人ホームだ。いわゆる特養と呼ばれる一般的な老人ホームとは異なる。

どこが違うかと言えば、安土荘のような養護老人ホームの場合、暮らしが不安定だったり、居場所がないなど生活困難な人たちが市町村の措置によって利用できる。

一般的に知られている特養は、要介護認定が必要で、自宅での介護が困難な人が通ってくるなどなど。

65歳以上から利用できることは同じだ。

制度も細かいが、施設の呼び方ももう少し違いがあったらわかりやすいと思った。



声をかける人のほとんどが優しい言葉で応えてくれる。なんらかの事情や都合があったことなど第三者には見えない屈託のない表情が印象に残った。

安土荘は、繁華街から離れた田んぼが広がる地域にある。
その立地は、一般の人が訪れることはほとんどない雰囲気だ。
庭では入居者らしき人たちが、日なたぼっこをしながら煙草を吸っていた。
建物はかなり老朽化が進んでいるようにも見えた。中は明るいわけではなく、
昔の面影がそのまま残っている。

僕はそれが案外好きだ。

きょろきょろと辺りを見渡していると、「こんにちは」と、おばあさんが声をかけてくれた。

「誰かの息子かね？」

「いいえ、ここの写真を撮りにきたんです」

と答えると、「私を撮ってくれるかい？」

と、申し出があった。

喜んで写真を撮っていると、周りに人が集まり会話が弾んだ。

屈託のない笑顔が、緊張した僕の心を緩めた。



ここに来た時は、まだピンピンしていたんだよ！というお年寄りが多かった。でも時が経つほど、高齢化という問題に差し掛かってくる。

寝たきりでもなく、みなさん元気そうにしている。

そんな雰囲気だと包まれていると、なぜこの人たちがここで暮らしているのだろうと疑問が生まれてきた。

しかし彼らには、施設という場所が必要なのだ。

所長の上田薫さんの言葉で教えられた。

「現実の話少し申し上げますと……

家族との関係も希薄な人が多いんです。最近では虐待、破産、路上生活など、いろいろな経験をしてきた人たちの、終の住処になりつつあるんです。

でもですよ……。

制度の中では、暮らしの中の通過施設という立場ですから、この施設の次があるようにしていかななくてはならないんです」

その言葉に力強さを感じたが、時代の変化や地方でも進む核家族化のしわ寄せが、彼らの居場所に更なる壁を作っているように思えた。



足腰が丈夫で自由に行き来できる人はいいが、長期でここに暮らす人もだんだん高齢化し、自ら買い物に出掛けることもできなくなる。こうした飲み物やおやつなどの販売は、気も晴れるだろうし、心も踊ることだろう。

次の暮らしがあるということは、仕事とつなげたり、独立した暮らしを連携しながら見守る体制づくりをしたりするのだろうかと訪ねてみると、上田さんの表情がややくもった。

「実は次の選択肢がなく、行き場がないのが現実です。再就職は年齢的にも厳しい。家族の元に戻るのも難しいんです」

高齢化しているものの、安土荘の中に、認知症を患っている人もいるが、それ以外の人には、元気なおじいさんとおばあさんが多い。だからこの施設に暮らしていることを一般の人に理解してもらうのは、時間と労力が必要なんだろうと思う。



ここは長期で暮らしている場であるが、制限ははるかにゆると感じた。その中の時間を使い、趣味をいかしたり、中には大きな水槽を設置し、熱帯魚を飼っている人もいる。

行き場がないという同じような問題を抱えている精神科の患者さんや、安土荘で長期にわたり生活しているお年寄りが、僕の頭の中で重なり合った。

この人たちの居場所が、僕たちの暮らしの中に見えてこない。逆に僕たちの暮らしのスタイルが、彼らの居場所を狭くしている可能性があるのではないだろう

うか。

見えないではなく、見ないようにしてきたのは、地域に暮らす僕らかもしれない。



自分の子供たちも音信不通、近所だった友達からも離れ、身寄りも家ない。そんな人たちの気持ちに寄り添うことなどできないが、安土荘だけでなく、日本中には大勢、そんな暮らしをしている人がいることを、知っておくべきだろう。

ここを仕事として選択した職員は、どんなつらい過去を持ったお年寄りであろうが、制度に縛られていようが、変わらない向き合い方をしている印象を持った。「世間の人たちに、知ってもらうことが大事だと思うんです。世の中へ浸透していくことは、難しいことだと実感しています。

ご苦労されてきた人たちばかりですから、この場所ではおだやかに、そして楽しく……」

一人のおばあさんが、食堂に設置しているピアノを弾いてくれた。
「何でも好きな音楽をリクエストして」
「禁じられた遊び」は弾けますか？
返事はなくただ首を縦に振り、ゆっくり弾き始めた。



ピアノの先生をやっていたころに比べれば、その腕前は落ちただろうが、いい音を聞かせてもらった。何人の生徒を育てたのだろうか、そんなことを僕は考えていた。

若いときピアノの先生だったそうだ。
なぜだか分からないが、安土荘に暮らしている人と呼吸が合う気がした。
彼らの暮らしを支えるスタッフは、利用するお年寄りのもっとも近い人であり、家族のような存在なのだろう。
誰しもが僕を素直に受け入れてくれた。それは日常の安土荘での暮らしがすべてを物語っていると僕はそう感じた。